

# 「プレイは楽しく」

(第四十八回)

ピアノを習ったことがある人なら、クスツと微笑む舞台がある。銀座で公演された「2.ピアノ4ハンズ」だ。ステージ上にあるのは、2台のグラランドピアノだけ。演じるのは、

カナダ人の男性。ピアノスト2人のみ。すなわち4つの手となる。

クラシックやジャズ、ポピュラーなどをデュオで演奏し、音楽で楽しませる。演者がお互いにピアノを習う子どもと

教師役になり、その演技でペーソスと笑いを誘う。これには子ども頃に不承不承レッスンさせられた経験がにじみ出ているのだ。同じような場面

を想い出す観衆は、まさに自分のことのように感じられる。さらに、英語による洒落も少なくない。教師が悩む腰(back バック)の痛みに対して、子どもが音

## 健康のススメ

板東 浩

楽家バッハ(Bach)バークと発音)と切り返す。

今年、カナダと日本の外交関係が樹立されてから75年という節目の年。芸術・文化、学術・教育のイベントが開催されている。その一つがこの劇なのだ。

そもそも、ピアノなどの楽器を演奏するのはplayで、演劇もplayという。スポーツもゲームも、楽しむのも遊ぶのも、少しいたずらをするのも、すべてplayである。この感覚は欧米的なもの。芸術が生活の中に溶け込み、ウィットやユーモアにも通じている。特に音楽は共通の言語とされ、誰もが共に感じ笑いを通い合わせる。

ピアノ経験者は、今ならば楽しくplayできるはず。このころ、あなたはニコニコと微笑みながらいろいろなプレイをして楽しんでいますか？

(医学博士・内科医師)